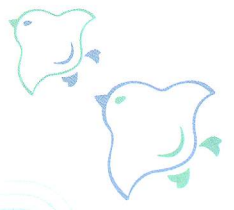


# 京潮の香り



旧知の仲から届いた近況報告、一枚のCDは「禅」の心を中に秘めた、心地よいジャジー境

小生がインチキ歌謡曲DJ「タイムストッパーズ」として巷をお騒がせ、ご迷惑をおかけしていた頃から早15年、当時、私のプレイ場所を提供してくれた仲間に東山安井のクラブ「GARDEN」のオーブニングスタッフから独立、大和大路は四条下がった「クラブ「エンテナ」跡に「Afroline」を立ち上げた内川正彦という男がいた。一緒にDJスケジュールを考えたり、フライヤーをつくったり、本誌に無理矢理コラムを書かせたりと、そんな間柄からほとんどいついっていいほど、彼の店に入り浸っては呑んでくれたりもんである。住まいも同じ山科区、自転車でも10分ほどで行き来できる範囲だったので、この男とは公私に渡りひたすら呑んでいた、そんな記憶しかない。今から思えば、音楽で通じ合うというよりは単に酒で繋がっていただけだったような気がする。

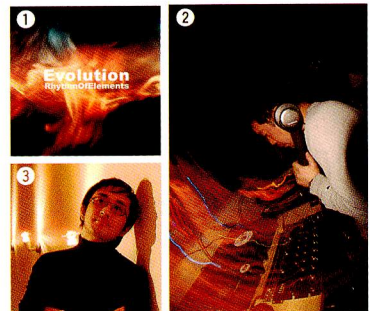
そんな彼から久しぶりに電話がかかってきた。もともと実家が長野とは聞いていたが、「東京に本拠を置いて音楽活動に本腰を入れる」とか何とか言っていたのだろうか、放蕩息子で家族の面倒

を見るのが得意な方ではなかった男、まして職業はクラブDJである。私の傍からいついなくなっても何の不思議もない男、その男が「新しいCDアルバムを出したんで一度聞いてほしい」とのたまうのだ。一週間ほどして物が届き、暇つぶしに車の中で流してみるところでしよう、小気味のいいグループ、ジャジーなサウンドがディープなハウスに包まれて、どこなく懐かしくそれでいて決して小煩くない、何とも洒落た大人なアルバムに仕上がっているではありませんか。タイトルにも掲げられた「Evolution II (進化)」は正に彼の音楽的成長を物語っていた。

最近の音楽傾向と符合していたことがある。いたずらにだが半世紀も生きてきた二人、互いに影響された音楽ルーツに大した相違はない。ましてコレクションのアナログレコードを引つ張り出してきては、チャック・マンジョーネやジョー・サンブル、はたまたシャカタクまで聴き直す昨今である。かのブリティッシュロック界のオルガン奏者、ブライアン・オーガーまでもが息

子カルマと娘サヴァンナを引き連れ「オブリヴィオン・エクスペリエンス」再編の下、ジャジーかつフュージョンな有機嫌サウンドを表現している時代でもある。このグループはもう一度来ると確信していた矢先のことだけに、実に嬉しいサウンドであった。

理由はもう一つある。彼が送られてきたサンプル盤だけに記された「禅」の文字がそれだ。こいつが何故だかやたらと気になった。外国人に京都を案内する際、法然上人の阿弥陀様論を唱えるより、自分自身を顧みる行為を論ずる禅を案内する方が、彼らの理解を求めやすいことがある。凡俗ながらもその「禅」の言葉の向こうに、人生の真理が未だ見えない小生の焦りが拘泥したのかも知れない。内川本人に聞けば、日本人の美学「侘・寂」をコンセプトにアコースティック×エレクトロニクスが融合する様を追求したかったとそう言っているが、「常にそこに立ち帰る難しさ」内観」を実のところ、模索しているに違いない。



1. DMR (ダンスミュージックレコード) のコメントを見ても、Body&SoulのDJ3人衆やシカゴ・ディープハウスの雄Ron Trentらを筆頭に、アルバム内の「Guitar suite」や「Tribe #2」などが早くから国内外のディープ/クロスオーバー系のDJ達にヘヴィ・プレイされていることについて注目していたことが分かる。流行り廃りとはまったく無縁のアーバンジャジーな音楽性に、流石と程よいさじ加減の実験性を見事に融合させた快作！と称賛している。2500円HMV、Tower Record、Jet Set RecordsなどでNow on sale! 2. 永年「京」の地に第2の故郷を置いている経験を活かし、'09年は和をコンセプトにしたアルバム「禅」を発表予定の内川正彦。テクノやブローケンビーツといったエレクトロなトラックとアコースティックなピアノ、ベースに尺八や三味線などの邦楽要素を取り入れた和フューチャーを展開するという。小生の出演はこの地でのLIVEのお題立てか。3. 4年連続の欧州ツアーを行う他、オーストラリア、モロッコなどのプレイでも活躍、海外でも高い評価を得るクリヤ・マコト氏は、平井堅、土岐麻子などの作・編曲家としてもその名を馳せる。同時代性×POP性を持ち備えたメロディメーカーは世界を股に掛け多忙な日々を送る。彼が満を持して歳月をかけたくり上げた集大成、初のフルアルバム「Evolution」は、どんな時代を経て聴き続けることのできる、ハイクオリティな内容に仕上がった。ハウスミュージックの従来イメージを刷新する快作、いや名作となるに違いない。

介するとしよう。地元長野のクラブ「Oto」をプロデュースしたり、東京・青山の「クラブ「LOOP」」でDJ活動をする傍ら、「Rhythm Of Elements」としてのユニットを本格的に始動させた、内川正彦の小生のライナーノーツはここからである。

さて、それでは本題のアルバムを紹介

1. ブロックンビーツもさることながら、これが全部日本人の手によるサウンドだとは信じがたいグループ感だ。6曲目の「Tribe-Spiritual」は海が大好きな私にとつて、もう瞬間サーフィン・トリップ移動ものだった。というのも坂口憲一的地球放浪TV番組「この夏は忘れなない」で、彼がコスタリカのウィッチーズロックでこの機嫌な波に乗っていた時のサウンドにも相通じ、それはもう何とも言えない心地よい仕上がりなのである。ラスト9曲目の「Mr.Magic」は故グループ「ワシントンJ.E.」の名曲をファンキーなサックス&ギターで巧みにカバーした秀作。クリヤ氏のリスベクト感が言わずもがなでギタープレイに表れる。

一週間でヒットチャート内を目まぐるしく移動動くJポップ、最早カラオケのマンスリーナンバーも軽やかに歌えなくなった近頃の小生、小室哲哉の復帰に望みをかけるよりは、こういう安心できるアルバムでゆっくり一時を過ごしたいものである。京都の禅宗のお寺でライブができることを、密かに企みながら...

モックン・カズロー ● 京都生まれの京都育ち、生家は染屋という小生粋の京都人。現在の「京都CF!」の根幹に携わった前編集長。現在は「京都CF!」のご意見番を務める傍ら、広告企画制作から大学のプロジェクト講師まで、ジャンルの垣根を越えて京同社大の仕事をこなす。趣味のサーフィンより、街場の小さな波に乗るのが上手いともっぱらの評判である。「京都CF!」スタッフブログ「ご意見番の無責任、町案内」連載中